

シンポジウム 「身体とその周辺」

要約

コーディネーター 小林昌廣 (京都造形芸術大学)
シンポジスト 森口邦彦 (染色家)
黒竹節人 (伝統意匠建築家)
茂山千三郎 (大藏流狂言方)
三上賀代 (舞踏家)

はじめに

舞踊学会が京都という地で開催されることを考慮して、京都で活躍されている幾つかのジャンルの方々から、身体という鍵語を中心にして、自身の仕事人間の身体というものに関わっているかという問題について発表していただき、討議した。参加されたシンポジストは、身に纏う着物の意匠に新しい視線で関わっている染色家の森口邦彦氏、京都の町屋や景観について独自の観点から活動されている黒竹節人氏、伝統的な狂言の世界でさまざまな斬新な試みをされている狂言方の茂山千三郎氏、前衛的な舞踏の身体性をベースに人間の表現について実践されている三上賀代氏の四人である。以下はその発表の要約である。

森口邦彦：着物を着ることとたちふる舞うことを考慮した意匠でなければならない。展示のしかたや飾りの衣装だと着られないものができてしまう。規定に対する戦いとして表現はあるのだが、自分の表現は、いつも未完成だと思っている。着物としての完成度は、着る事、動く事によっている。衣桁に掛けて平面としての表現（写真1）が、着

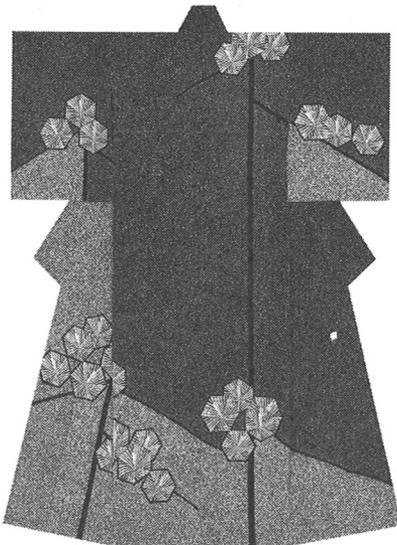


写真1 縮緬地蒔糊友禅着物「青松」

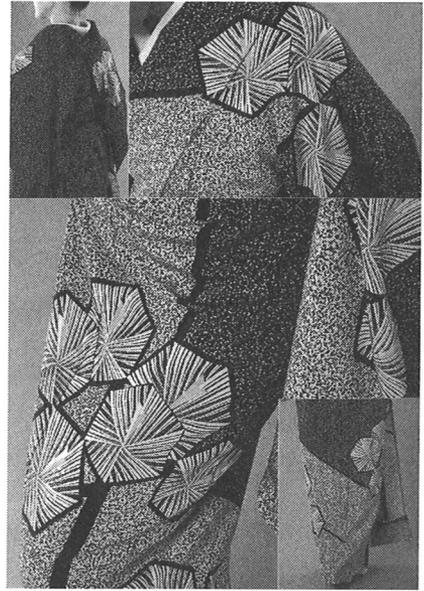


写真2 縮緬地蒔糊友禅着物「青松」

ることによって、新たな表現を生んでいる（写真2）。つまり友禅の意匠は、衣桁にかけて平面としての表現世界を完成させなければならないが、着る人の年齢や体型に応じた人体の美しさを強調できるものでありたいと思っている。立振る舞いでのさまざまな表情を考慮した意匠でなければならない。この点がおもしろいところで、衣桁にかけた着物の二次元世界の色彩や形態は、見事にその構成や表情をかえて現れ、再構成されていく。音楽でいえば、楽譜が音となり、音楽となる瞬間である。伝統的な生活文化を越える現代の作品として友禅染をつくっている。

黒竹節人：町家は祭礼を中心とした建築、いわば祇園祭のような設計である。伝統文化を起業していくことと鉾町とが価値を共有する。そこで、百足屋町のような結束固い町がある。ハレとケで建具の入れ替えがある。例えば、床の間などは普段はカバーされている。町屋は、作法を学ぶ道場として機能すべき、つまり膝をおって座る所作というものを可能にするような空間としてあるべきだ。旧家というのは、伝統的文化財の対象として捉えられがちで、実際に生活できない。保存ではなく、使いながら再生していくことが重要である。町家の建築様式を体感してもらうには、どんなスタイルにすればいいのだろうか。私個人としては、「町家の奥座敷で一杯飲ませてほしい」と思っていた。ならばレストランがいいだろうと思い、京都風のおばんざいを出す店「百足屋」や能舞台をつくることにした（写真3、4）。



写真3 くろちく

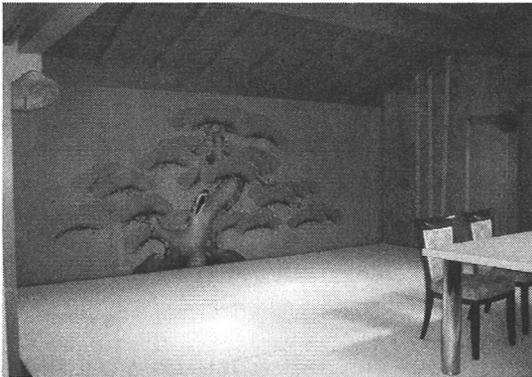


写真4 くろちく2階の能舞台

茂山千三郎：能とは、800年前の物語を描くものであり、過去を対象にしている。ただし時代を限定しない。複式夢幻能では、ワキの修行僧がでてきて、時代を限定しない。ある時代を今のドラマとして描いている。それに対して狂言というのは、つねに今を演じる。たとえば、「これはこのあたりにすまいするものでござる」という表現で明らかだ。能と狂言とは正反対である：能は悲、狂言は喜、能は候、狂言はござる。能は歴史上の人物、狂言は名前を明かさない（一番近いところにいる人物）。

狂言師にとって体をつくるのは、2番目であって、まず謡、せりふがある。しかしともに師匠のコピーをする。従って、自分の身体というものはない。能舞台というのは、三間四方の規制のかたまりである。だからそこから、観客に想像力を働かせる。例えば、「木六駄」では12頭の牛を追う難しさがある。そこで12頭の牛を観客に見せなければならぬのだ。

三上賀代：13年前に「とりふね舞踏舎」を結成した。大学で世界でただひとつ、暗黒舞踏ゼミを担当し、4年間毎年25人ぐらいたい人をゼミから輩出している。舞踏家、表現者になりたい人はほとんどいないが、白塗りの体験舞踏、「38億年の記憶」というパフォーマンスを行う。学生たちは、自らの体に38億年の生命の記憶を遡る。

京都では、03年、04年京都大学西部講堂7歳から86歳までの人々を対象に舞踏を教えている。野口体操が基本である。舞踏は、身体の零度から始まる。38億年かけて立つこと、肉体に出会うこと庭土、暖簾、そういうもの、町家の中に美意識をはぐくんでいく。それが身体感覚へと繋がっていく。森口先生が、下半身の動きは、膝を中心にデザインをする。だから周辺ではない。着て動いてはじめて完成する。だから衣装は、身体の周辺ではない。千三郎さんは、能の装束は、武士道の影響。だから紋付はかま。狂言の演じ手によって、かまの帯の締め方の強弱に違いがある。空間が規定していく体を土方巽は注目した。そしてそれが、東北の雪のなかから戸板、畳、押入れ、そして衣装として出現する。土方は、稽古場で「お前が踊るのではない。衣装が踊るのだ。」といった。

まとめ

異なったジャンルのプロフェッショナルを招いてのシンポジウムであったが、身体を時間（古典と現代）の軸で捉える視線と空間（伝統と創造）の軸で捉える視線とが意外にもクリアに、「いま・ここ」に生きている私たちの身体へと注がれた。染色や建築に関わっているお二人の話の方がより具体的・現実的な身体の動きや立ち振舞いを際立たせ、狂言や舞踏という本来は生身の身体を扱っているお二人の話が、理念的とまではいかないが、身体の内奥の思想へと深く潜行しているありさまが感じられ、新鮮と言えれば新鮮であり、当然と言えば当然と思われるひと時であった。

（文責 小林昌廣）